

国際演劇交流セミナー 2015

International Theater Exchange Seminar 2015

パレスチナ特集

【ダイジェスト版】

パレスチナの演劇を体験しよう！

長年に渡って続く紛争の中、困難な状況下において演劇がどのような役割や意味を持つのか。個々の体験に基づく作品作りの方法を探ってみよう！

パレスチナで演劇と地域社会の濃密な関係作りを実践するイエスシアターのイハップ・ザハダア氏を中心に俳優自身の体験に基づいて創作された戯曲『3 in 1』や難民キャンプの子供たちとの共同創作戯曲を読み、長年に渡って続く紛争の中、困難な状況下において演劇がどのような役割や意味を持つのかを考え、同時に個々の体験に基づく作品作りの方法を探るワークショップと戯曲リーディングとなりました。

企画：林 英樹

【 in 東京 】 会場：芸能花伝舎

ワークショップ

8月2日（水）14：00～17：00

8月3日（木）18：30～21：30

8月4日（金）18：30～21：30

リーディング『3 in 1』&シンポジウム

8月5日（土）19：00～21：30

【 in 郡山 】 会場：郡山市音楽・文化交流館（ミュージカルがくと館）

ワークショップ

8月6日（木）19：00～21：30

8月7日（金）19：00～21：30

8月8日（土）14：30～21：00

リーディング『3 in 1』&レクチャー

8月9日（日）19：00～21：30

レクチャー「パレスチナの演劇活動～自分たちの体験から作る演劇」



○ 講師 イハップ・ザハダア

イハップ・ザハダア / Ihab Zahdeh

1977 年パレスチナ、ヘブロン市生まれ。1997 年高校在学時より俳優・スタッフとして活動。2002 年にエルサレム通信制大学にてアラビア語学科を卒業後、2004 年ポーランド、グダニスク大学にてドラマ・イン・エデュケーションコースを修了。イエスシアター創立メンバー。2012 年より日本のNPO 法人ピースビルダーズとイエスシアターによる、教員・ソーシャルワーカーを対象としたトレーニングプログラム「Yes 4 Future」にて、ロールプレイ・インプロバイゼーションのワークショップを担当する。他劇団への客演も多数。2010 年にはアルカサバ・シアターによる『占領下の物語』日本公演に参加、2014 年には「紛争地域から生まれた演劇5 - Part2」で来日。



【 in 東京 】会場 芸能花伝舎

ワークショップ「パレスチナの戯曲を読む&創作の試み」

戯曲『3 in 1』、『Playing in a Camp』、『Little Adults』

● 1日目 8月2日(日) 14:00 ~17:00

● 2日目 8月3日(月) 18:30 ~21:30

● 3日目 8月4日(火) 18:30 ~21:30

リーディング『3 in 1』&シンポジウム

8月5日(水) 19:00 ~21:30

演出：秋葉よりえ (NPO 法人グラシオブルオ)

出演：長谷川征司 籠津弘順 阿部達也

シンポジウム「パレスチナの演劇活動 ~ 社会との関係を作る演劇」

パネリスト：イハップ・ザハダア 細田和江 (イスラエル文学・文化、中央大学) 秋葉よりえ

司会：林英樹

【 in 郡山 】会場 郡山市音楽・文化交流館 (ミュージカルがくと館)

ワークショップ「パレスチナの戯曲を読む&創作の試み」

戯曲『3 in 1』、『Playing in a Camp』、『Little Adults』

● 1日目 8月6日(木) 19:00 ~21:30

● 2日目 8月7日(金) 19:00 ~21:30

● 3日目 8月8日(土) 14:30 ~17:00、18:00 ~21:00

リーディング『3 in 1』&レクチャー

8月9日(日) 14:00 ~17:00

リーディング『3 in 1』

演出：岩田隼 (劇団ユニット・ラビッツ)

出演：柳沼耀斗 野川和希 遠藤聖汰

レクチャー「パレスチナの演劇活動~自分たちの体験から作る演劇」

ITI(国際演劇協会)日本センターの企画で各国センターと連携して「紛争地域から生まれた演劇」で、一昨年、『3 in 1』を翻訳し、リーディング上演しました。そのときにイハップさんは、他の演劇祭があつて来られないということで時期をずらし、昨年 1 月にイハップさんに日本に来てもらいレクチャーをしていただきました。そこで 1 回で終わらせたくないと思ひ、尚且つ、実際に彼らはどういふ芝居を作つているのか、そういうことをもっと理解したい、知りたいと思ひ、日本演出者協会の国際部でこゝう企画をぜひやりたいということを提案し、今回の企画に至りました。

○ **イハップ** みなさんにお会いできて嬉しいです。私は日本に来るのはこれで 3 回目となります。パレスチナのヘブロンという町から来ました。ヘブロンという町にはもともと芸術というものはありませんでした。そこでぼくは友達と一緒にイエスシアターというグループを立ち上げました。1996 年から 2007 年の終わり頃まではずっと演劇のワークショップを中心に行っていましたが、2008 年の初めから、現在のようなイエスシアターという劇場としての形をとるようになりました。このワークショップを通してみなさんと、よい協力関係をもつてグループをつくりたいと考えています。順々に自分の名前を言つて自己紹介をしましょう。怒りながら。優しく。泣きながら。暑いところで。寒いところで。

・ 自己紹介する。

○ **イハップ** 今度はバラバラに歩き回りましょう。出会つた人と名前を交換してください。それから出会つた人と挨拶、握手などもしてください。

・ 名前をどんどん交換していく。

○ **イハップ** 簡単ですね。ではまた 1 列になってください。今度は受け取つた名前に自分なりのイメージの動きをつけて歩いてみてください。さあ、ここに印をつけたので、ここまで歩いてきて発表してください。

・ いまの自分の名前を名乗りそこに動きをつける。

○ **イハップ** 最初の入り口として簡単なことをやってみました。名前を交換するのはロールプレイとして非常に有効なものです。なぜなら、私たちは子供の頃から、自分の名前というものを刷り込まれて生きているからです。ではまた自由に歩いてください。音を立てずに、静かに。そしてみなさんの中の誰かが止まつたら、全体も止まつてください。

・ 歩く。

○ **イハップ** お互いのことをよく見てください。そしてこの人に注目しようという人を誰か 1 人決め、その人を上から下まで観察



しながら歩いてください。

- ・ 歩く、止まるを繰り返す。

○ **イハップ** ストップ。みなさんは自分の決めた相手を十分観察しましたね。では、あちら側に観客として移動してください。1 人だけ、前に出てください。あなたが選ばれました。

- ・ 1 人前に出る。

○ **イハップ** あなたは喋らずに、その人を演じてください。他の人はそれがこの中の誰なのか当ててみてください。

- ・ 観察した相手の歩く特徴をとらえて歩く。(分からなければどんどん誇張していく)
観客はそれがこのメンバーの中の誰であるかを当てる。

○ **イハップ** 名前を交換したときからすでに演技は始まっています。私たちは日常から常に演じているのです。演じるのは俳優や演出家だけではありません。人間は誰でも演じています。夫婦喧嘩だって演技なのです。

- ・ 1 人ずつ順番に行う。

○ **イハップ** みなさん全員やりましたか。ではまた歩いてください。次は私がフリーズと言ったら止まってください。そのときにできるだけ大きく土地を占領してみてください。空間に空いているところがないぐらいに。寝ころんでもかまいません。

- ・ 歩く。ストップの合図で手足を大きく広げたり、寝転んだりする。

○ **イハップ** 素晴らしいです。いい雰囲気できていますね。次はインプロヴァイゼーションです。私のストップの合図で、目があつた人と即興で演技をします。

- ・ 歩く。ストップの掛け声で、目があつた人と即興で演技をする。

○ **イハップ** 今度は円のまま、身体を使って音を出し合います。例えば、普通の拍手では面白くないので、どんなふうにも構いません、拍手の代わりになるような音の出し方を、1 人ずつ考えてみましょう。

- ・ 腕を叩く、足踏みする、顔を叩く、などのアイディアを出し合う。
- ・ 1 組のペアを除いて観客となる。

○ **イハップ** では即興をやってみましょう。どのようなことを演じて構いません。2 人で何かの物語を演じてみてください。そこに観客席から誰かがストップをかけます。そのストップをかけた人が、いま即興をしているペアの片方のどちらかを選択してタッチし、その人物と入れ替わってください。その立ち位置を利用して、どんどん新しい物語をつくっていきましょう。では始めましょう。

- ・ 即興をする。

○ **イハップ** 最終日には何かしらの作品の形らしきものをつくって発表したいと考えています。私がやりたいと

思っているものはスピーディーなものです。感覚も、動きもスピードを要します。私はスピードを非常に大切にしています。そこで今度は速度に関するアクティビティーをやってみましょう。今日はとても楽しいです。私はみなさんの1人1人から非常にたくさんのことを学ぶことができます。

では、歩いてください。これから私はみなさんに状況を与えます。私の言ったとおりの状況を演じてください。10cmのヒールを履いています。ヒールがきついです。急いでバス停に向かっています。タイトスカートをはいています。はい、戻してください。

・ 歩く。

○ **イハッブ** 次は、妊娠9か月の女性です。腰が痛く、足も重いです。おなかで自分の足元が見えません。視線は先になりますね。呼吸は短く浅いはずです。いまにも生まれそうな状態です。足もむくんだ感じですが、死ぬわけではありませんが、腰も痛い。はい、戻してください。

・ 歩く。

○ **イハッブ** 次は、年寄りです。腰が悪く関節が痛い、目もよく見えません。歩いては止まって、歩いては止まって。早くは歩けません。目が悪いので、あまりよく見えていません。真似をするのではなく状況を感じるようにしてください。はい、戻してください。

・ 止まる。

○ **イハッブ** 普通に歩いた状態と、お年寄りとどちらが良いですか？ では、また歩いてください。

・ 歩く。

○ **イハッブ** 今度はひざ上まで泥沼につかっています。田んぼでも構いません。泥沼を抜けるとそこは砂漠です。サラサラの砂漠ですけれど熱いです。靴は履いていません。ここも通り抜けなければなりません。70度。すると突然、砂漠が石鹸の塗られた床になりました。つるつるしています。石鹸の床を抜けました。今度は森と森にかけられたロープがあります。下は谷底です。綱渡りをしなければなりません。しかも後ろから人が来ています。

・ 歩く。

○ **イハッブ** では戻して普通に歩いてください。誰かが私を狙っている。すごく怖いです。誰かが私の命を狙っている。

・ 歩く。

○ **イハッブ** 冷たい雨の中を歩いています。大雨です。傘はなし。台風、嵐です。はい、戻してください。

・ 歩く。

○ **イハッブ** 体調が悪いです。あと数時間の命。もう末期です。声を使ってもよいです。はい、戻りましょう。歩

いてください。

- ・ 歩く。

○ **イハッブ** 退屈です。とても退屈。悲しい。とても悲しい。もっとも愛する人を失った。それがまだ信じられない。声を出してもいいです。喋ってもいいです、叫んでも。

- ・ 歩く。ある者は叫ぶ。

○ **イハッブ** 何かの出来事がある、怒りが爆発する瞬間です。声を出してもいいです。

- ・ 歩く。怒りを爆発させる。

○ **イハッブ** 外で気持ちがいい。木の下でゆっくり横になって幸せな感じ。

- ・ 横になる。

○ **イハッブ** 他に誰もいない、自由だ。目を閉じて、呼吸をして、子供時代を思い起こしています。お父さんが小さい頃にくれた風船のように。この風船は、風が吹いて少しずつあがっていきます。目はつむったままにしてください。風船が山肌に沿って少しずつあがっていきます。みなさんは風船です。少しずつ上がっていくにつれて、まわりの気温が下がっていきます。どんどん上がっていきます。高いところから地面が見えます。少しずつ降りてきました。今度は海に行きます。海の上、水面に触れるか触れないかぐらいです。大きな波がきて、また風船は高く舞い上がります。砂漠にきました。暑いです。どんどん暑くなります。砂漠の地面から数センチぐらいのところを飛んでいます。家からずいぶん遠く離れたところにきました。1人です。他には誰もいません。また上昇していく。漂っていく。また海の上。波の上。上がったたり下がったり。さらにもう1度強い風が吹いて、またどんどん上がっていきます。高度があがり、気温が下がっていきます。見えるものが小さくなっていきます。また下がります。地面がどんどん近づいてきました。降りてきて、最初の木の下に戻ってきました。好きなタイミングでゆっくり目を開けてください。そして好きなタイミングで体を起こしてください。



- ・ 目を開き、ゆっくりと身体を起す。

○ **イハッブ** いまどんな気持ちか話したい人がいれば、話してください。

○ **参加者** ぼくはパレスチナに行ったことはないが、行った気持ちになりました。

○ **イハッブ** その通りですね。パレスチナには海も山も砂漠もあります。

○ **参加者** 悲しみと怒りの感情が、木の下にずっと残ってしまった。

○ **参加者** 風船に自分を置き換えるのが、だんだんしぼんでいく感じとか、うつろいゆく感じが風船だとイメージしやすかった。

○ **イハッブ** 先ほどの歩くところから今やったところまででほしい 10 分ぐらいでやりましたが、それぞれに感じてやろうと思えば何日もかけてできることです。本当は老人のことだけでも 1 週間ぐらいかけてやりたい。その老人は身体のどこがどのように痛くて、そこでどのようなことを具体的に感じていて、どういう経験をしているのかをつかんでいくには、やはり 1 週間ぐらいはかけた方がいいです。そこまで到達したら瞬間的にそこに入れるようになります。そうすれば、目の前の人に病気のことやさまざまなことを、メイクや小道具などを使わなくても伝えることができるようになります。いろいろな演出家がありますが、私個人としては、役というかキャラクターは内側からそうであると俳優自身が信じていないと絶対にいけないものだと思うし、内側からくる感情を伝えてほしい。そしてそれがお客さんに伝わるように、時間をかけて時間をかけて、時間をかけることで結果的には瞬発的に(役に)入りこめるようになるのです。今日ここまで始めからやってきたことは、俳優であれ若者であれ子供であれ、インプロをしたり、役をつくったり、ストーリーを語ったり、自分の中にあるものを表現することもそうだし、自分にあるものをいったん白紙の状態にしてそこにまた新たに書き始めるという、そういったあらゆるプロセスへの近道だと思います。ではまた円になってください。これはみなさんもお存知かもしれませんが、これは新しいグループを作るときにやるものです。1 人がセンターに入ってください。

- ・ 全員で小さな円をつくる。1 人センターへ。

○ **イハッブ** 私たちは絶対この人を倒さない。倒れる人をみんなで支えます。真ん中の人は足を地面に着いたまま、身体を伸ばした状態でいてください。周りにいる人は真ん中の人を押しだしたり、回したりしてください。お互いを信じるのが大切です。みんなが必ず中心に入るように、順番におこないましょう。

- ・ センターの人は胸の前に手を組み、(自然に)倒れようとする。
周りにいる人はそれを両腕で支えて、優しく戻してやる。

『3 in 1』

○ **イハッブ** 以前(日本に来たとき)も同じこの戯曲を使って普通に配役を決めて普通にリーディングをしましたが、今回はそんなことはしたくありません。3 日目の最後には発表をするのですが、役の分け方も、役の名前に沿わずに自由にやってみようと思います。今回はこれだけ大勢の参加者がいてくれてよかったです。これは 3 人の芝居ではないのです。

- ・ キャスティングをする。台詞を振り分けていく。



○ **イハッブ** 今回のリーディングでやりたいことというのは、1 人主役というかメインになる登場人物がいて、基本的にはこの人物、台本上の名前が誰であれ、この 1 人の人物の頭の中にあるいろんな声だとか、記憶だとか、その人が経験してきたあらゆることを、その 1 人の人の声として全員でやりたい。彼の頭の中をぐるぐる回っている、彼が人生で経験してきたいろんな場面なり、思った事なり。この劇ではシーンとシーンの繋がりというのは、一

応のトランジションはあって、身体の動きだとか姿勢で(次のシーンに)繋がることもあれば、台詞の内容で繋がっていくときもあります。そのため、男性は男性、女性は女性ということは全く気にしなくてかまいません。ですから、うまくいけば『3 in 1』ですけど、3 人の同じような重さを持った人物の話ではなく、1 人の人物の物語になると思います。私が信じていることは、舞台には不可能はないということです。ではやってみましょう。今日は時間ありませんので、冒頭部分だけ読んでみましょう。

- ・ 本読みをして終了

ワークショップ

2 日目 8 月 3 日 (月)

○ **イハッブ** ここに椅子がひとつあります。1 人 1 人喧嘩するのではなく、全員でこの椅子をシェアしてください。1 人で座ったら全員が座れません。どうにかしてみんながその椅子と繋がりを持ってください。1 人 1 人がその一部になってください。

- ・ やってみる。

○ **イハッブ** いいイメージですね。簡単です。写真を撮りましょう。ではもう一度、いまとは違ったイメージを試してください。いろんな方法を見つけてほしいです。

- ・ いろいろな方法を試してみる。

○ **イハッブ** これが『3 in 1』です。次は椅子の使い方、座る以外の方法を見つけてください。

- ・ 椅子を使っていろいろ試してみる。

○ **イハッブ** 『3 in 1』の人物は常に何かを考えています。自分は何をするか、何をされたのか、何があったのかを。この人物の頭や身体の中にある世界、宇宙を表現しなければなりません。全員で 1 つのものを作り上げなければいけないのです。

- ・ イハッブ、ひとつの椅子にみんなが座る(イメージ)を作る。

○ **イハッブ** これでバスのシーンになるのではないのでしょうか？ 『3 in 1』の中にあるいろいろなシーンを思い浮かべてほしいです。台本自体を発展させてもいいし、私たちのこの脚本が日本の作品になるように発展させたり、適応させてほしいのです。では作品を作りましょう。準備してください。

- ・ 台本を準備する。



○ **イハツブ** なんでもきれいに整った状態のものを演じるのではつまらない。演技というものはいろいろな問題、通りを歩いていたら事故に遭い、病院に担ぎ込まれる。そのようなものです。そこで奥さんが病院へお見舞いに来たところに愛人までがやって来る。そういうものなのです。そこから家族の問題へと発展したりなど、簡単ですね。しかし頭の中で話をつくるのは簡単だが、実際にやるのは難しいです。私はいろいろなテキストを読みますが、やれそうもないものに敢えて挑戦します。私はいつも難しいと思うものをやる。私はパレスチナという、占領されていて、大変でなにもないところから来た、ということをおみなさんに教えに来たわけではありません。みんなと一緒にいること、やること、まあ、一緒に泳ぎに来ました。私のところには海はないから。

- ・ 本読みを始める。

○ **イハツブ** では、実際に探っていきましょう。もちろん台本を持ったままでかまいません。

- ・ 配役を確認する。

○ **イハツブ** ここはバザールです。物を売っている人もいるかもしれないし、食器を洗っている人がいるかもしれません。賑やかです。

即興でやってみましょう。

- ・ 市場の即興。



○ **イハツブ** そこにシェイクスピア劇団がやって来ます。みなさんが商人でなくて、お客さんでも構いませんし、特別なにもしてなくても構いません。

- ・ イハツブ、上手奥にひとつ椅子を置く。即興を始める。しかしうまくいかない。

○ **イハツブ** では別のやり方を試してみましょう。みなさんは一つの劇団です。シェイクスピア劇を演じようとしています。物売りでもお客でもなく、みなさんはその場にいてください。

- ・ イハツブが演出家となり、場面を返しながら作品を作っていく。即興とリーディングを合わせて。

○ **イハツブ** これは私たちがやった演出とは全然違いますが、やり方としてその場にあるものを使ってやりたいので、椅子があれば椅子を使い、このスペースの中にあるもので芝居を作っていきます。そのため、今日の前半にやったような、椅子ひとつを使ってみんなが繋がってください、といったような漠然としたものを、私はまず、あなたに俳優に投げかけます。それで何も出てこなかった場合には、私から提案をします。そしてまた何かを投げますが、まずは皆さんから生まれたアイデアを私に見せてください。そうやって作品を作っていきます。

- ・ シーンを作っていく。

○ **イハツブ** 今日はここまでです。おつかれさまでした。



○ **イハップ** 歩きましょう。

- ・ 歩く。

○ **イハップ** 私がアップと言ったら上にジャンプしてください。ダウンと言ったら床に手をつけてください。ジャンプ。回る。アップ。ダウン。回る。歩く。

- ・ 指示通り動く。

○ **イハップ** 今日のウォームアップはこれだけにしておきましょう。昨日やった椅子のワークショップを思い出してください。今日、1つのものを作る、そして解体する、そしてまた別の塊をつくる、その繰り返しです。解体する、創る。昨日までやって来たこと全てが『3 in 1』なのです。ということで、頭からやっていきましょう。では昨日の通りに始めてください。

- ・ 脚本を手に持ち、通しながら少しずつシーンを作っていく。

○ **イハップ** 私たちが今回行うのは 1 回目の作業です。こういう風に作って行って、最後までいったらもう 1 回やります。1 回目なので今回はやりながら立つとか座るとかの指示を私が出します。それで一通り最後までやって、もう 1 回、頭からやって、どんどん変えていくのです。その次には俳優の意見も取り入れながらやっていきます。そういう過程を 20 日間ぐらいかけて私たちは作品を作るのですが、今回の WS はリーディングだけではなく、私たちの作品の作り方をちょっとでも体験していただければと思っています。では、最初からやってみましょう。



- ・ 作品をつくる。

作品発表時間。およそ 20 人ぐらいの WS 見学者。観客席にはちょうど日本に来日中のイエスシアター『3 in 1』のメンバーも駆けつけてくれた。

○ **イハップ** 今日はようこそおいでくださいました。これはだいたい 8 時間半ぐらいの成果です。私たちは私たちが遊ばせていただくので、みなさんもどうぞご自由にお楽しみください。

- ・ 発表

【 リーディング上演 】

- ・ リーディング演出:秋葉よりえ(NPO 法人グラシオブルオ)
- ・ 出演 : 長谷川征司、笹津弘順、阿部達也
- ・



【 シンポジウム 】

「パレスチナの演劇活動～社会との関係を創る演劇」

- ・ パネリスト:イハップ・ザハダア、細田和江(イスラエル文学・文化・中央大学)、秋葉よりえ
- ・ 司会 : 林英樹

○ **林** 3 回目の来日ともなるといろいろ経験されていると思うので、最初は日本に来て、実際にお客さんと接したり、今回は WS をやって、参加したメンバーといろいろやりとりをしたりコミュニケーションをしたりしたと思うのですが、その辺のお話からうかがってみたいと思います。

○ **イハップ** まずは企画してくださったみなさんに、ありがとうございます。1 回目は俳優としてきたわけですが、前回のリーディングと今回のリーディング、どちらも『3 in 1』を、私たちの戯曲を日本で読んでいただいたことが本当に夢のようでした。

イエスシアターがこうやって日本に来るために大変な努力をしてくださった方が複数おります。この場をお借りしてお礼を申し上げたいと思います。今村さんはピースビルダーズという日本の NPO で活動されていて、ヘブロンの子供たち、パレスチナの子供たちの心身両方の健康増進というか、ドラマや演劇を使った活動に本当に尽力してくださいました。ヘブロンの子供たちもちろんそうですし、イエスシアターが存属すること自体に関しても彼女には大変助けていただきました。3 年間、ピースビルダーズとのお付き合いが続いているのですが、自分が日本に来ることもそうですが、私と日本の演劇の繋がりもできました。

毎回日本に来るのはとても刺激になっていて、これは、自分自身の演劇的な、演劇人としての成長という意味でもそうだと感じています。前回のリーディング、アラビア語と日本語との両方でやることができ、もちろんそれは、アラビア語と日本語で違ったものでしたが、非常に面白い企画でした。前回のときにはもちろん、アラビア語の知識のない方ばかりですし、翻訳された訳文なので、それを読むというのはものすごく大変で、忍耐が必要だったと思うのですが、本当によく耐えてよく努力してくださった俳優たちに、私はすごく刺激を受け、その話は帰ってからイエスシアターの同僚たちにも話しました。

これからは今回の日本での体験についてお話したいと思います。

まず昨日までの 3 日間のワークショップでの参加者のみなさんの第一印象は、ものすごく経験がおありなのに、謙虚だし、演劇に対しての誠実さを感じました。参加者のみなさんの集中力の高さに驚きましたし、彼らのこの

WS にかける想い、その姿勢に、以前から知っているかのような、初めてここでお会いした方々とは思えないような、旧知の関係であるような感じがしました。

『3 in 1』というのは 3 人芝居なのですけれども、参加者は 14 人ほどいて、ただもう最初にみなさんとお会いしたときから、『14 in 1』として 14 人全員で一つの作品ができるだろうと確信していました。というのも、みなさんがものすごく経験をお持ちの、プロフェッショナルであるということが分かっていたからです。ですから私のやり方とか私の方向について来てくれるだろうという確信がありました。私の人生には幸せな日々というのは数えられるぐらいしかないのですが、昨日は確実に、その幸せを感じられた日となりました。私自身が学ぶことの多い 3 日間でした。私がみなさんに提供できたものよりも多くのものを、私は得られたと思いますし、参加者 1 人 1 人から多くのことを学ぶことができました。私がやったものは簡単な、情報だとか知識だとかというものだったのですが、この交換で得られたことを、私が日本の演劇の親善大使となり、パレスチナ、ヨーロッパの芸術家たちにも、このことを伝えようと思います。言葉というものはまったく障害ではないと感じられました。この WS では個人が集団になるとうプロセスを体験できたと思いますし、この集団というのも本質的な意味で、人間的な集団、グループというものを演劇の力を借りて作れたと思います。みなさんに感謝と敬意の念とを表したいと思います。

○ **林** 秋葉さんに『3 in 1』のことについてお話ししたいと思っています。『3 in 1』の中でいろいろ出てきますよね、ヘブロン伝統的な社会とか、そこでどう生きるのかということなど、その辺の背景を、日本の私たちに分かりにくいことなどありましたらお話ししたいと思っています。実際に現地へ行って、いろいろと見聞してみて、ヘブロンはどんな感じだったのでしょうか？ 彼らの日常はどのようなものなのでしょう？ それから、彼らの活動についてなどもお話しいただければと思います。

○ **秋葉** 台本の節々にいろいろと書いてあるのですが、バリケードが急に、気分、イスラエル兵たちが、こういうギザギザのものをそこら辺にポンと置いたら通れなくなってしまうんです。そこから何時間も出勤できなかつたりとか、学校に行けなかつたりとか、ID を見せるとか、みんなが必ず持ち歩いている 3 点セットがあるんですね。そういうのとか、夜中に大きなバスが来て、何十人も男性が捕まり、子供までもがイスラエル兵に捕まえられるんです。日常は笑っている生活も多く、お茶を飲むのだから日本人よりも時間をとってコミュニケーションをとるんですけど、常に抑圧されているような状態がいつもあるんです。想像できない世界。だからみんな、怒りは常にたまっているんです。怒りを出すという表現は政治ではダメ、演劇の力でない、彼らは捕まってしまう。だから演劇を通してクリエイティブに社会を変えて行こうということはやっています。イエスシアターのメンバーは、本音を伝えよう、みんなを教育とか、先導しようという思いが彼らにはあって、大きな力になっているのだと思います。

○ **林** この物語『3 in 1』のリーディングの演出をやってみてどうでしたか？

○ **秋葉** 私たちにははかりしれない、(彼らの) 苦しみや苦労があって、どうすればできるのだろうかとかとひるむんですね。どうすれば真実を伝える媒体となれるのだろうかというところから、ひとつひとつみんなで戯曲の解釈をすり合わせていきました。英語とフランス語の台本も照らし合わせながら検討しました。そこでなぜ私たちは芝居をしているかといえば、人と繋がりたいとか、何かを伝えたいということがベースになっているなど、そこに立ちかえて、伝えたいという想いは一緒だろうということで、自分達の悩みとか、怒りとか、フラストレーションとかそういうものに変

えて、稽古を進めていきました。しかしもちろんベースは、『3 in 1』の 3 人の声 = 何千人のパレスチナ人たちの声を伝えさせていただくということで、私たちはそのままお伝えするということに集中しました。

○ **林** はじめは『3 in 1』のタイトルの意味がよく分からなかったんです。今回それがわかったような気がしました。3 人は 1 人であり、1 万人の 1 人、1 億人の 1 人、それは個人でありコミュニティーでもある、一部であり、全体であるそういうものなのかなと。

では続きまして、細田さんにもお話をお願いしたいと思います。

○ **細田** 根本的な問題として、ヘブロン（西岸自治政府の本部所在地）の町はいまどのような状況にあるのかということの話をしてみようと思います。ヘブロンはヨルダン川西岸の南の最も大きい町といわれています。人口はほとんどムスリムが占めています。みなさんはパレスチナ人とかアラブ人はほとんどがムスリムだと思われるかもしれませんが、実はムスリムの他にもキリスト教徒もかなりいまして、しかしヘブロンに関してはイスラム教徒が多数を占めている。ヘブロン（西岸自治政府の本部所在地）の一番の占領の問題というのは、ヨルダン川西岸をみなさんはパレスチナ自治政府が管轄している地域だと思ってると思うのですが、ヘブロンに関しては町の中に小さな入植地がたくさんあってですね、ひどいところになると、アパートの建物の 2 階にはユダヤ人、1階にはアラブ人ということもあって、上からごみが降ってくるということもあります。

先ほど仰いましたように嫌がらせでチェックポイントをつけられてしまったりだとか、単純にたまたまその時間にユダヤ人がいっぱい通るのでとか、そのときの担当者のメンツや気分で嫌がらせをされるんです。勝手にチェックポイントが置かれたりだとか、恒常的に置かれているチェックポイントというものもあって、まっすぐ歩けないとか、商店街もオープンしてはいけないとかいう状況の中で、みんなの怒りがたまっているんですね。ただ、これは私の印象ですけど、去年実は私、イハブのところに行ってイハブにいろいろと案内してもらったのですが、ヘブロンは元気な町という印象がありました。怒りを積極的なパワーに変えるというか、なんとかして自分たちの占領をどうにかしてやりたい。パレスチナ人の権利を勝ち取ろう。というような、とてもポジティブな面を持っている。私はイスラエルの中に住むアラブ人に接することが多いのですが、彼らはあまり怒りを前に出さない、諦めている感じがあるんです。しかしヘブロンは違う。俺たちが頑張らないと、という積極性を感じるんです。

それから秋葉さんが、イエスシアターは演劇教育に熱心という話をされていましたが、やはり占領されて鬱屈状態にあるものをどうにか、特に子供たちがですね、どう解消するかというのは大きな問題なんです。そこで大声を出す、体を動かすというのは一番大切なんですね。私が行ったときにたまたま、女の子 10 人ぐらいの発表会の練習を見たんです。私が入って 2 時間ぐらいの間、先生は怒る、怒る、女の子たちが何かやって動きを止めるたびに、先生たちは怒って、「もう 1 回やんなさい！」というふうに何度もやらされていたんですね。女の子たちはヒジャーブも被らずに、それに見学をしている私が気になるのか子供たちは私に手を振ったりなんかするんです。でも先生はものすごく真剣にやっていて、それがすごいなと心から思いました。とても面白かったです。だから占領で暗くなるとか鬱屈しているとかいうよりも、そうではないパワーがある。イエスシアターを媒介することで出てくるヘブロン全体のパワーというものを私は感じました。

○ **林** 初歩的な質問なのですが、なぜ戦争？ なぜ占領？ ナクバなんて言葉も出てきますが、これはなんだと？ なぜそんなことになっているのか？ 最近では日本の総理大臣がイスラエル国旗と日本の国旗を背にしてメ

ッセージを出したりとか、いろいろイスラエルと提携して、そんなことも関わって、私たちはどうすればいいのかなんてことも考えるのです。

○ **細田** そもそもパレスチナ人はずっとこの地域に住んでいて、パレスチナというのは国名というよりも地域名で、あの辺一帯をパレスチナと言う地域名で呼んでいたんですが、1900年代に入ったころからオスマン・トルコ支配となり、そこからの独立というところで、もちろんそこにはアラブ人たちが独立を目指した、そこに欧米列強が入ってきて、いろいろ土地を分割しようとした、それと同時に、ヨーロッパで迫害を受けたユダヤ人たちが国を作るというので大量に移入してきたということで、紛争地として、結局 1948年にイスラエル、ユダヤ人が一方的に国家を作ると宣言して、それ以降、それに怒った地元の住民たち、パレスチナ人と戦争になったことから、もう 60年以上紛争地帯となっています。

1993年には一応オスロ合意というものが結ばれて、パレスチナに国家を作ってイスラエルと分離するような動きが出たんですが、結局国家までは至らずに、自治政府という形でヨルダン川西域と、それから飛び地になっているガザというのがパレスチナ自治の地域として残されています。そのため、国連でも承認されず、国家ではなく地域という形で認められています。だからどうしても、国家に準ずるのですが国家ではないので、さまざまな、国を出たりすることとか、いろいろなところでイスラエルの妨害にあたり、それから実際イハップさんもヨルダン川西岸から飛んできたのではなく、一度ヨルダンまで陸路で出て、ヨルダンから飛行機に乗って、それもヨルダンに出ることは国を出ることになりますから、パスポートが要りますがパレスチナは自治区ですのでイスラエルの許可がないと国を出れないので、イスラエル政府が駄目と言えよヨルダン川西岸から外に出られないというようなことが起こります。

○ **林** 5年前に、イスラエル国内で活動しているパレスチナ人のターヘル・ナジーブさんを招聘し、彼の作品を日本で上演することをしたのですが、そのとき、ターヘルさんは、「政治的な活動をしているわけではないが、私たちにとって政治抜きに毎日の生活は考えられない」と発言されました。その発言がとても印象的でして、生活と政治。でも本当はそうであるはずなんですよね。この日本ではあいまいになってしまっている。無関係に演劇や芸術に関わることは超越的であるというか、社会や政治とは関係なく超越しているというような錯覚を持ってしまっている。だから、逆に考えると、社会の中での自分たちの位置づけがはっきりしなくなっている、じゃあ暇つぶしなのか？これは『3 in 1』の中の台詞にもありますが、『3 in 1』のなかでは、先進国では演劇や芸術というものは人格の成長の基礎的な部分、という認識をとっていて、まあ、日本が先進国なのかどうかはわかりませんが、そういうことも含めて社会には浸透している。この演劇の中で問いかけてられていることは私たちにとってそんなに遠いことではないのだと思います。

では、客席の方からも何か意見を聞いてみたいと思います。

○ **参加者** パレスチナ国内ではどれくらいの演出家や俳優がいて、その人たちはどこでどんな教育を受けるのでしょうか？

○ **イハップ** イスラエル国内を合わせてもだいたい俳優と演出家をあわせて、150~300位しかいないと思います。名の知れている人は 80人ぐらいでしょうか。最近の若い世代たちには、西岸の中に二つ演劇を教えている

る学校があります。

去年の F/T でパレスチナの共同製作をした俳優のほとんどはラマッラーにある演劇学校で学んだ人たちです。私たちの世代はほとんどがヨーロッパで学びました。パレスチナの演劇人がグループになり、東ヨーロッパでトレーニングを受けるプログラムがありまして、学校で理論を学ぶよりも、トレーニング(実践)が多いです。それもあって、パレスチナにはさまざまな演劇のスタイルがあります。そのミックスになっているとも言える。その中から一つを選んだり、融合させたりすることができます。

イエスシアターを例にとれば、イエスシアターになる前には、こうやってヨーロッパ各地の劇団を転々としながらトレーニングを受けていました。他のメンバーもヨーロッパの各地を転々とししました。オランダ人の教授が多かったです。アムステルダム、ポーランド、ベルギー、ドイツなどを転々とししました。私自身は、さまざまな演劇の手法やスタイル、そのどれも敬意を払いますが、私がやる場合には、自分のいる社会、観客にどうすれば伝わるかを最優先に考え、スタイルとすれば自由にやっています。

社会というものは早いスピードで発展するものですから、演劇のスタイルというものが時代に合わなくなるというのも早いですし、同時代であっても、ひとつの社会に適したものが別の社会には適さない場合があるので、その時代と場に応じたスタイルというのはその場その場で作られるもので、共通にできるものではありません。教育という面ですと、演劇は大学の学問ではなく日々の実践であり、あらゆる面において社会と繋がっているものだと思います、そしてもちろん演劇は政治的です。

○ **参加者** 芝居をやるということは、日本で俳優をやるのとはわけが違う。それだけ厳しい状況の中で、なにがモチベーションになっているのか？

○ **イハップ** 私がパレスチナのためにできること、それは自分が舞台の上に立つこと、あるいは演劇を作ることだけです。人間としてのパレスチナ人を芸術的な形で、より人間的な形で人にお見せすること。結果として舞台の上にいるのはパレスチナ人なんだ、という順番で考えています。だからフリーダムファイターなのです。

言葉というのは瞬間的に伝わります。伝わるスピード、影響力、危険性、言葉の持っている破壊力は爆弾よりも大きいと思っています。爆弾は落ちて大きな音が鳴り、死者が出て血が流れるわけですが、言葉はそれよりも早く伝わり、言葉はそれよりも大きな影響力を持っています。この先ぼくが牢屋に入っても、『3 in 1』のテキストは存在してしまっているわけで、ここで公演が行われたという事実が生まれたということなのです。ぼく個人の自由は誰も奪えません、演劇、テキスト、書くこと、芸術は人の心に届くのです。

○ **林** 芸術抜きに闘争はありえない？

○ **イハップ** 文化なしの闘争はありえません。闘争に文化は不可欠です。文化人が関わっていないものは危険です。あらゆる闘争、解放運動の目的を達成するにはその後ろに文化や芸術に携わる人たちが必要で、文化や芸術をないがしろにしたり、無視するようないかなる動きも成功しないし危険であるのです。

私たちのやろうとしていることは、コピーではなく新しい考えを持った世代を作ることです。その新しい世代の人たちは進歩や考えを自由に表現できるようになってほしい。言われたことに対して何にでも「はいはい」と返事をしない。「なぜ？」と問うことができるようになってほしいのです。そういう状況を打破したいのです。この目的のために、

芸術や文化は水と植物の関係に例えられるのです。水は芸術や文化、これなしにはこの新しい世代の人たちを作るという演劇を達成することはできない。社会にとって演劇は必要不可欠だと思えるような若い世代を育てたいのです。

占領の危険性やひどさは物理的に存在しているよりも大きなものがあります。壁は壊すことができます。入植地であっても撤退させることは物理的にはできるでしょう。しかし物理的なものではなく、パレスチナ人の心の占領、抑圧がより大きな問題なのであって、これに対して働きかけるためにも芸術や文化は欠かすことができないのです。例えばパレスチナで 40 人死んだ、これは普通の出来事です。つい先週も幼児が入植者に殺されました。出来事、哀しみ苦しみ怒り、それを記録すること、発展させること、それを表すこと、これが演劇の力です。占領にとって芸術は危険なものになり得る。それは今まで起きた出来事を、芸術によって永久的に形として残すことができるからです。

○ **参加者** 最後のシーンで死を選ぶということは、現地ではどう受け止められたのでしょうか？

○ **イハップ** 最後のシーンは観客によって二つの解釈がなされると思います。自殺したとみる場合、身体は死んでいるけれど、彼の考えはとどまる、風船ですね、そういう裏の意味もあります。身体はそこで死んでいるけれど、彼の考えが身体を抜け出ることによって本当に祖国へ近づくことになる。もう一つは、自殺しているのではなく、パリの大道芸人のようにふざけている、という解釈もできます。つまりパレスチナ人の死が娯楽となる。もちろん生きている状態で認めてもらう方がよいですが、世界はパレスチナ人がこういう風に死ぬのを待っているのか？ だけでもパレスチナ人が全員死んでも、パレスチナ人の考えは永久に残り続けるし、自由を求めて走り続けるパレスチナ人の考え方は永久に残り続けるのです。

○ **林** 昨日ラエッドさんが見学に来ていましたが、発表を観て泣いていたんです。世界中が私たちを見捨ててしまっている。それなのに、こんな遠くの日本で、私たちの芝居『3 in 1』をやっている人たちを観ていたら、胸がいっぱいになってしまったと言っていました。



○ **イハップ** 私がいちばん気に入ったのは皆さんがここに靴を脱いで上がってくることでした。舞台の上は神聖な場所なのです。みなさん、ありがとうございました。

..... 記 録 公家義徳

郡山でのWSの内容は基本的には東京と同じですので、詳しい内容は省略させていただきます。
レクチャーと作品発表は記録いたしました。東京でのWSは台詞は変えずに3人の芝居を14人で行う『14 in 1』という形式をとりましたが、福島では発表のために使う作品は『3 in 1』ではなく、台詞をアレンジして彼らの別の作品『難民キャンプの芝居』（福島バージョン）を発表する。

